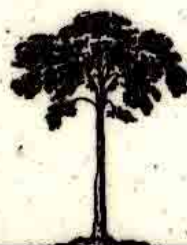


かたまり



弘文堂思想選書

坂部 恵

by Megumi Sakabe

館

たり

坂部 恵



弘文堂思想選書

弘文堂

(著者略歴)

坂部 恵 (さかべ・めぐみ)

1936年 神奈川県生れ

1959年 東京大学文学部卒業

現在 東京大学文学部教授

著書 『仮面の解釈学』(東京大学出版会)

『理性の不安——カント哲学の生成と構造』(勁草書房)

『「ふれる」ことの哲学——人称的世界とその根底』(岩波書店)

『和辻哲郎』(岩波書店)

『鏡の中の日本語——その思考の種々相』(筑摩書房)

『ペルソナの詩学——かたり ふるまい こころ』(岩波書店)

ほか

かたり

〈弘文堂・思想選書〉

平成2年11月30日 初版1刷発行

著者 坂部 恵

発行者 鯉淵 年祐

弘文堂

101 東京都千代田区神田駿河台1の7-13

TEL 03 (294) 4801

振替 東京 2-53909

ISBN4-335-10020-5

©1990 Megumi Sakabe

Printed in Japan

印刷・図書印刷

製本・井上製本所

目次

第一章	「へかたり」の基底……………	1
一	詩と歴史……………	3
二	人文科学としての「へかたり」……………	11
三	「へかたり」の回路……………	16
第二章	「へかたり」の位相……………	25
一	言語行為としての「へかたり」……………	27
二	「へかたり」と「へはなし」……………	33
三	垂直の言語行為・水平の言語行為……………	40

四	「へかたり」と「へふり」	45
五	「へかたり」の位相	52
第三章	「へかたり」の時間——いまはむかし	55
一	「むかし」と「いにしへ」	57
二	「へかたり」の時制——H・ヴァインリとに即して	69
三	浮き彫り付与とアオリスト	77
四	発話の方向	88
五	時制の移行・時制の転移	95
第四章	「へかたり」と「へうた」と人称と	109
一	ヤーコプソンの二軸理論	111
二	言語の詩的機能と人称の転移	120

三 時間の詩的転移としての「へかたり」	130
---------------------	-----

第五章 「へかたり」と世界——time immemorial	145
--------------------------------	-----

一 時間とのたわむれ・時間の可逆性	147
-------------------	-----

二 詩と科学そしてアオリスト	159
----------------	-----

あとがき	175
------	-----

装幀 代田 樊

第一章

へかたりゝの基底

一 詩と歴史

「わたしどもには、歴史と伝説の間に、さう鮮やかなくぎりをつけて考へることは出来ません。殊に現今の史家の史論の可能性と表現法を疑うて居ます。史論の効果は当然具体的に現れて来なければならぬもので、小説か或は更に進んで劇の形を採らねばならぬと考へます。わたしは、其で、伝説の研究の表現形式として、小説の形を使うて見たのです。この話を読んで頂く方に願ひたいのは、わたしに、ある伝説の原始様式の語りてといふ立脚地を認めて頂くことです。伝説童話の進展の経路は、わりあひに、はつきりと、わたしどもには見ることが出来ます。拡充附加も、当然伴はるべきものだけは這入つて来ても、決して生々しい作爲を試みる様なこと

はありません。」

折口信夫（一八八七—一九五三）の若い頃の作品に「身毒丸」という小説がある。

俊徳丸あるいは弱法師を主人公とする高安長者伝説から「宗教倫理の方便風な分子をとり去って、最原始的な物語りにかへして書いた」、十数ページの小品で、大正六（一九一七）年六月国学院大学同窓会誌「みずほ」第八号に掲載され、現行の全集では十七卷（芸能史篇Ⅰ）におさめられている。^{*} 右の引用は、この小篇の末尾に付けられた短い「附言」の中間部分からのもので、見られるとおり、折口は、ここで、「伝説の研究の表現形式として、小説の形を使うて」、「ある伝説の原始様式」を再現することをここらみている。

^{*} 全集にある「大正三年頃稿」という注記が今日の研究状況からしてもはや支持できぬこと、この小説の執筆完成時期はその後大正六年六月と判明した掲載誌の刊行に先立つごく近い時期と考えるのが穏当であろうことについては、懇切な資料を付して折口博士記念古代研究所の松本博明氏の御教示を得た。記して深謝申し上げる。

折口のこの大胆でもあり、今日の目からして先駆的でもあるところの背後には、「殊に現今の史家の史論の可能性と表現法を疑うて居」り、「史論の効果は当然具体的に現れて来なければならぬ」と考える、時代状況（あるいは、より正確に言えば時代の言語表現のありかた）への批判がひかえていることは、多少とも注意深い読者の目には、ただちにあきらかなところだろう。

敷衍すれば、ここに見られる時代状況ないし時代の言語表現のありかたへの折口の批判の要点は、およそつぎのようなところにある。第一に、この初期の「身毒丸」においても、あるいは「神の嫁」、「死者の書」など後年の一連の「小説」においても、折口には、通常の小説——実録、虚構——実録、フィクション——ノンフィクションといった区別を、二者択一あるいは両立不可能と見なす当今の世の常識に抗して、両者の連続性、ないしやや視点を変えていえば、両者の根底にある「かたる」ことという共通の基盤に確固として定位する一種「反時代的」な姿勢が一貫して顕著にみられる（「死者の書」は小説であるが、なほ著者が古代の靈魂信仰を説く学問の小説的表現

とも言へる。」全集二十四卷（作品4、創作）「あとがき」。第二に、こうした根本の姿勢の直接のあらわれのひとつとして、右の「身毒丸」への「附言」においては、「現今の史家の史論の可能性と表現法」、すなわち、いわゆる近代科学の客観主義、実証主義の圧倒的影響のもとに、対象ないし客観の〈記述〉を言語の本来の機能とみなし、したがってまた、〈科学的〉な歴史学における叙述もまた、客観的に定着された文字・文献資料を偏重する受動的な対象記述につくされると考える近代実証史学の姿勢——後年オースチンのいう〈記述主義的誤謬〉に過度に汚染された近代実証史学の姿勢——を根底からして批判し、「史論の効果は当然具体的に現れて来なければならぬ」として、史論、歴史叙述ないし歴史についての〈かたり〉に、いわば〈かたり〉として端的にひとに訴えかけ、ひとのこころの形成にあずかる力——これもオースチンの表現を借りていえば、一種の〈行為遂行的力能〉（performative force）——をとりもどさせよう、——あるいはガダマー風にいえば、伝統を通じて承け伝えられる〈作用史〉（Wirkungsgeschichte）のうちにはたらく歴史の形成作用ないし形成力の一環に、

みずから身をもつて、つらなろうとする——行き方が、おのずから生じてくる。

近代の実証史学や、客観主義的な歴史観へのとらわれから徹底して自由な、今日の学問状況、思想状況から見て際立って先駆的といってもよい、このような折口の姿勢は、西洋の近代以降の歴史論や歴史哲学のあれこれよりは、かえって、直接に、アリストテレスのよく知られた、歴史と詩（この場合主として（悲）劇的虚構）の真实性の対比論と、（折口の論は、伝説についてのいわばメタレベルでの叙述ないしかたりにかわり、アリストテレスのそれは、歴史の現実の成り行きの模倣的再現にかかわるという差異はさておくとすれば）、すくなくとも一面において、深くあい通ずるものをもつとわたくしは考える。

ちなみに、アリストテレスの『詩学』における議論は、つぎのようなものである。

「さて、右に述べられた事どもからまた明らかなのは、そもそも詩人の仕事とは、すでに生起した事実を語るのではなく、生起するかも知れない出来事を語ること、

すなわちいかにも納得できそうな蓋然性によってなり、またはどうしてもそうなる筈の必然性によってなりして生起しうる可能的事象を語ることだ、ということである。けだし、歴史家と詩人との差異は韻律を以て語るか否か、という点に関わるのではない。例えば、ヘーロドトスの著作は、これを韻律にあてはめて書き上げることもできるであろうが、しかしそれがともかく歴史であるということ自体は、韻律を伴おうと伴うまいと、いささかも変りはしない。両者の差異は寧ろ今述べられた次の一点に存する、すなわち、歴史家はすでに生起した事実を語るのに対し、詩人は生起する可能性のある事象を語る、という点にある。このゆえに、歴史に較べると詩の方が、より一層哲学的つまり学問的でもあるし、また、品格もより一層高い次第である。その理由を更に換言してみれば、詩が語るのは寧ろ普遍的な事柄であるのに対し、歴史が語るのは個別的な事件だからである。

ところで、ここで普遍的と称する意味は、一般にいかなる性格の人物には、いかなる種類の事柄を語ったり行なったりするのがいかにも起こりそうな蓋然性にあた

るのか、またはそうあらねばならぬ必然性にあたるのか、ということである。こういう問題こそが詩作の狙うところであって、登場人物の名前などは、本来、二の次に立てられる問題なのである。これに対し、個別的と称することの意味は、例えばアルキビアデースという実在の人物が実際に何を行ない、またいかなる仕打ちを受けたのか、という問題のことである。」「(『詩学』九章、邦訳全集十七巻、今道友信訳)

ここに見られる「歴史に較べると詩の方が、より一層哲学的つまり学問的でもある」とする考えが、へかたりゝやへふりゝ(模倣的再現・演技)のもついわば理想化的抽象とでもいったはたらきに着目しそれを重んずる点で、さきの折口の引用に見られた、「史論の効果は当然具体的に現れて来なければならぬもので、小説か或は更に進んで劇の形を採らねばならぬと考へます」という発想に、おのずから通うものをもつことは、一見してあきらかだろう。「具体的に現れて来なければならぬ」「史論の効果」に対応するものとして、アリストテレスには、一方で、へぺリペテイアゝ(どんでん返し)やへアナグノーリシスゝ(発見的再認)などの仕掛けをもってするへカタル

シス」という悲劇の効果についての周知の考察が、他方で、『弁論術』における（歴史に関するものをも含む）〈弁論〉や〈かたり〉のひとの感情におよぼす効果についての立ち入った言及がある。

アリストテレスのこうした一連の考えもまた、西洋では、比較的新しく一九六〇年代から八〇年代にかけて、ポール・リクルールの物語論、ヘイドン・ホワイトの歴史叙述類型論、ガダマーの根源的隠喩化機能（*grundsätzliche Metaphorik*）に関する考察などのところみによって再発見・再評価される気運にある。ここでも、近代科学の実証主義、客観主義の呪縛がようやく本格的に解けて、ひとつには、ひたすら受動的な対象記述にたいして、〈かたり〉や〈ふり〉のもつ理想化的抽象（やさらには対象の構成）のはたらきを正当に評価し、第二には、そうした〈かたり〉や〈ふり〉のもつパーフォーマティヴ・フォースに注目する行き方が、ひろくひとびとの関心をひく状況が生じつつあるといっていよう。

こうした現今の世界の思想状況・研究状況のなかから見返してみると、さきにふ

れた一九一〇年代後半、第一次大戦終り近くの折口信夫と、またすぐ後にふれるその周辺のひとびとの発想の斬新さと先駆性が、いまさらながら納得されるという次第になるのである。

二 人文科学としての〈かたり〉

そこで、話を、「身毒丸」末尾の「附言」にもどすとして、前節の冒頭に引いた箇所にしきだつその最初の部分は、つぎのようなものである。

「この話は高安長者伝説から、宗教倫理の方便的な分子をとり去って、最原始的な物語にかへして書いたものなのです。

世間では、謡曲の弱法師から筋をひいた話が、江戸時代に入って、説経師の題目